いわかぐみ

令和六年三月　第九六号

◇ 村の景観と歴史・人物（15）
◇ 民具が語る生活史（民具㉒ワカン）
◇ 方言一考（いたまし）
◇ モノ言うもの（発掘された遺物の数々）
◇ 歴史館行事の報告・お知らせ

村の景観と歴史・人物（15）

峠を越えた人たち⑥

タラレバの義経

渡　辺　伸　栄

剣ヶ峰の弥次郎兵衛

あのバカが！頼朝は舌打ちをしていた。

九郎義経、かわいい弟だが、あいつは、兄の苦労も世の大局も、なんにも分かっていない。結局は、単純な競技場のスタープレーヤー。それが、頼朝には腹立たしかった。

頼朝は、剣ヶ峰の上で必死に左右のバランスを取っている弥次郎兵衛だった。

右の腕の先には京の後白河法皇。武家を手玉に取っては使い捨てる怪物。左の腕の先には、関東の武士団。領地の拡張しか頭にない我利我利亡者ども。バランスを崩せば、頼朝は一気に剣ヶ峰からまくれ落ちる、危うい立場。

平家打倒に抜群の戦果を挙げた義経が、ともあろうに後白河法皇に丸め込まれ、取り込まれようとしていた。有力武将を離反対立させ漁夫の利を得ようとするいつもの手。それに義経が気付きもせずに乗っかった。

百害あって一利なし。義経打つべし。頼朝が大軍で上京の姿勢を見せると、法王は例によって手の平返し。見捨てられた義経は、哀れにも都落ち、京から姿を消した。

頼朝の深慮遠謀

頼朝は義経を逃したかった。何といっても血を分けた弟、しかも、大人気の天才スタープレーヤ。殺害だけは避けたかった。

義経の逃亡先は分かっていた。かつて庇護してもらった奥州藤原氏しか、ヤツの頼れるところはない。

頼朝は、後白河法皇の朝廷とは対立を避け、東日本を自分の統治下に置く策を構想していた。東西の公武並立政権構想。平家を倒し、木曽義仲を倒し、義経を京から追い落として、その構想はほぼ実現しつつあった。

ネックは奥州にあった。藤原氏が平泉にあって、東北日本を支配していた。これを潰さないことには、頼朝の大構想は実現がかなわない。

義経の奥州逃亡は、頼朝にとってチャンスそのもの。引き渡しを求めても、奥州の盟主の面子上、藤原氏が応ずるはずはない。武力攻撃の大義名分が立つ。我利我利亡者共にとって合戦は、所領拡大の最大チャンス。待ってましたとばかり、頼朝の命令一下、奥州に攻め込むはず。

頼朝のこの策謀を実現するには、義経に生きて無事平泉にたどり着いてもらわなければならない。途中で、手柄を競う御家人が、義経を発見捕縛でもしようものなら、すべては水の泡となる。

三潴左衛門尉（みづまのさえもんのじょう）の登場

逃走経路は予想された。東海道や北陸道は海岸部や平野部が多く、人目につき見つかりやすい。逃亡者なら中央部の山の道を選ぶ。

美濃・信濃・越後の関所に、因果を含めた確かな人物を配置した。頼朝の策謀は隠し、あくまでも兄弟としての人情から内密に見逃すようにと。

上関の桂の関には、三潴左衛門尉が配置された。

親は九州三潴荘（みづまのしょう）の荘官を務める豪族三潴氏。地方豪族の子弟は、京に派遣され朝廷警護の任に着くのが習わし。左衛門尉とは、朝廷左衛門府の守備隊長の官名。義経も同じ官職にあったから、顔見知りでもあった。

三潴荘は平家の支配下にあった。ために、九州の源平合戦で三潴氏は敗戦没落。朝廷に勤めていた左衛門尉は、帰るべき家を失った。そんな時、頼朝の意を受けた御家人から誘われた。越後国は頼朝の知行国、人事は頼朝の意のまま。

かくて、三潴左衛門尉は越後国岩船郡関郷へ下り、桂の関の守将となった。

義経は予想通り山岳地帯を通過、途中の関所では、計画通りに見逃した。頼朝の意を受けた隠密が、傀儡師（くぐつし）と呼ばれた人形使いになって各地に散った。この者たちが、義経の逃亡経路をカムフラージュするために、北陸道通過の噂話を面白おかしく語って歩いた。

その効果もあって、義経は難なく桂の関に達した。三潴左衛門尉は、知らぬふりの見逃し通過にはしなかった。屋敷にあげ、心からの慰労ともてなしで義経を迎えた。

ここ桂の関の先は、国境の峠。そこを越えれば出羽の国。奥州藤原氏の勢力圏。もはや誰も義経に手を出せない。だから、見ぬふりして素通りさせる必要もない。それが、三潴左衛門尉を配置した頼朝の、密めた人の情でもあった。

頼朝の大誤算

こうして、義経は無事奥州へ逃げ延び、藤原氏の庇護の下に入った。案の定、奥州藤原氏の総師秀衡（ひでひら）は義経の引き渡しに応じない。頼朝は、奥州攻略の策を練っていた。

そんな時、秀衡が病没し、跡を継いだ泰衡（やすひら）が義経を殺せと言ったか。泰衡の小物ぶりに呆れ、即座に奥州征伐を命じた。

結果はあっけない幕切れ。栄耀栄華を誇った奥州藤原氏は、関東軍の大攻勢によって全滅。東日本は全て頼朝の勢力下にはいった。

しかし、頼朝には思わぬ誤算が生じた。義経の死は、結局は、追い詰めた頼朝のせいにされた。あれだけの活躍をした義経を殺した頼朝。冷酷無比の大悪漢。腹黒い大陰謀家。恐怖の将軍。そんな評判のお陰で、頼朝の人物像は、ずっと悪いまま。

大河ドラマでどんなに人気俳優が頼朝役を演じても、一向に頼朝人気が逆転する気配もない。それもそのはず、国民的大人気者の義経を殺した張本人だから。

あ～、これはオレの大誤算。頼朝は密かに三度目の舌打ちをするしかなかった。

★　☆　★　☆　★　☆

タラレバは、もしこうだっ**たら**、もしこうなっ**いれば**と、事実と無関係の仮定の話。とはいえ、義経の逃亡経路は、今もって皆目不明。歴史学でも未解明。であるから、桂の関と我が村の峠を通った可能性が、ないわけではない。

その真偽はさておいて、三潴左衛門尉の子孫は、この後四百年、上関城の城主として羽越国境を守り続けた。これは、ファクト。

民具が語る生活史　㉒ワカン（輪かん）

例年に比べ小雪の1月末、関川小学校3年生が「昔の道具調べ」という単元で民具の体験学習に訪れました。当館では、①石うすできな粉を作ろう、②防寒着（みの・じんべ・菅笠など）を着てみよう、③照明（燭台・行燈・ランプなど）・暖房器具（こたつ・行火（あんか））に触れてみよう、④薪割り体験をしよう、⑤かんじきで雪の上を歩こう、の5つの体験を準備しました。毎年この時期に行われますのでどうしても冬の民具の体験が多くなります。準備をしていると、少し前までの生活は季節に根差したものだったのだなあとしみじみ感じます。

2月に入り児童からお礼状・感想文をいただき、大変楽しく拝見いたしました。ここでかんじきについての感想を何点かご紹介します。

「一番びっくりしたのは、かんじきです。理由は○○先生は雪にずぼっとはまっていたのにかんじきをはいただけでずぼっとはまらなかったのでびっくりしました」、「ぼくが一番ふしぎだとおもったのは、かんじきです。なぜかというと、ゆきの上をあるけるからです。ふつうははまるけど、かんじきはおちないからすごいとおもいました」、「わたしがはじめて知ったことは、かんじきで歩くと雪にうもれないことです。理由は、今の長ぐつは雪にうもれるからです」。

私たちが用意したものは「ワカン（輪かん）」、そして「スノーシュー」です。『日本民具事典』の「わかんじき（輪樏）」の記述によると、「木や竹を曲げて輪にし、あるいは簀子（すのこ）状に並べて、その上に足をのせる乗緒をつけ、さらに沓（くつ）に結束する結緒をつけた雪踏みの履物」とされています。ワカンは縄文時代の遺跡（青森県八戸市）から出土しており、かなり古い時代から狩猟に用いられてきたと考えられています。児童が感想を寄せてくれた通り、雪の上を足を大きく沈めずに歩くための民具です。靴の上から装着します。ワカンを履くと接地面積が増え体重が分散されるので雪に深く入らずに歩けます。さらに、斜面などではずり落ちにくくする効果があります。

江戸後期に塩沢の文人鈴木牧之（ぼくし）が記した『北越雪譜』（ほくえつせっぷ）には、雪国の生活が活写されています。「○雪中歩行の用具」には「かじき（かんじき）」・「すかり」が紹介され、「すかり」は一回り大きいものを指すようです。「○かじき○すかりの二ツは冬の雪の柔らかなる時ふみこまぬ為に用ふ」（P.191『北越雪譜』）とあり、雪国の生活を代表する民具だったことが伺えます。

（図P.191『北越雪譜』より）

さて、児童は、「昔の道具・昔の道具」と連呼していましたが、関川村ではワカンはまだまだ現役です。地元のホームセンターでは時期になると今でもワカンが販売されています。ただ、ボランティアスタッフの方や職員が持ち寄ったワカンは面白いほど少しずつ作りが違っていました。すべり止めのツメ（爪）がついているもの、金属製のもの、ナイロンなどのテープがついたもの、使い勝手の良いようにカスタマイズされたものもありました。それだけそれぞれがご自分の用途に合わせて普段から使われているのだと感じます。

興味深かったので、その他の感想を最後に何点かご紹介します。「はじめて知ったことは大豆を石うすでつぶしてきなこになることがかっこよかったです」、「むかしの道具は、ボロだと思ってたけど、いがいとべんりだなと思いました」、「じゅぎょうではみんな今の方がべんりといってたけど昔もまけてないと思いました」、「昔は天才だと思いました」、「昔はいろいろなちえを使っていたことがわかりました」。

民具の体験学習から、児童も私も様々な気付きを得ました。ボランティアスタッフのみなさまご協力ありがとうございました。（神田舞子）

参考文献 鈴木牧之編撰1936年『北越雪譜』岩波文庫、「わかんじき（輪樏）」日本民具学会編1997年『日本民具辞典』ぎょうせい出版社

方言一考・いたまし

「いたまし(い)」は関川村の方言では「もったいない」の意味である。若い人が亡くなると「いたましや、いたましや」と使うが、これは痛ましい、いう意味でなくて「まだまだこれからがあるのにもったいない」という意味である。古語で「いたむ」には、「強く悲しむ」と「金がかかる。損をする」の意味があり、現在の標準語の意味として残るのは前者で、方言としては後者の方だけで使われている、珍しい例である。WK氏も希代のいたましがり屋で、不燃物のゴミの中から拾った薬缶など自慢げに見せていた時期がある。家族の悪評が無ければどれだけ拾ってきたか計り知れないが、夫人の目が届かないところでは存分にいたましがるので、週末道の駅の巡回の時の恰好などは頗る見栄えが悪い。案外ときれい好きなので洗濯はしているのだろうが、限度を越えて使っているから、あちこち擦れ切れている。人の多い場所ではいかにも目立って、駐車している車のナンバーを調べて回る際には、良くクレームをつけられるらしい。人を見かけで判断するのは人の性だから仕方ない。ぼろぼろの菅笠を見かねて神田さんが買ったのはいたましくて使わず、笠全体を覆うカバーを今度は私が買ってあげると喜んで使っている。度を越したいたましがり屋はかえって人を心配させ迷惑を掛けるという話である。(安久)

モノ言うもの・発掘された遺物の数々

齊藤準氏が村に来てからちょうど十年が経った。女川の大規模圃場整備が始まるため、埋蔵文化財の調査員として村職員に雇用されたのである。最初の年の冬、我々山の仲間は彼を高坪山に連れて行った。山頂にテントを張って、大いに歓待する心づもりであった。しかし、冬の山は登山口まで行くのに一苦労、一汗流さないとならない。夏なら車で行く所まで雪道を歩かないとならないからだ。まともな山登りをしたことのない彼は一時間程歩いて着いた登山口でばたっと腰を下ろして動けなくなった。それから先は「もう少しあと少し」と騙し騙し、Kさんが先導して掛け声を掛け、気合も掛けて登る。かんじきを履き、雪を漕ぐようにして登る山は、体力も時間も夏の何倍も掛かる。私は最後尾から「群馬の子熊ちゃん、頑張れ」と祈るように見守るしかなかった。

彼のお陰で圃場整備は無事終わった。しかし彼は種々の都合で村を離れることになった。彼が掘った遺物を見る時、私は縄文時代に思いを馳せるよりは、あの冬の山での健闘を思い出すだろう。至る所青山あり。「幸(さき)くとばかり」歌うだけだ。(安久)※写真は遺物説明会の一コマ。

歴史館行事の報告

○山と花のスライド解説会　2月18日(日)、参加者22名。参加者のみなさんは来年度の山行きに思いを馳せました。

○古文書解読講座(1月～3月)　江戸時代の村の暮らしを古文書から学んでいます！令和6年度は5月8日(水)から予定しています。

○民具体験　1月31日(水)、関川小学校3年生

○昔の遊び体験2月28日(水)、関川小学校1年生

こま、めんこ、ゴム飛び、竹トンボ、まりつき等

お知らせ

○村民ギャラリー「歴史館所蔵絵画展」長谷部権次呂、鳥居敏文など、篤志の方々によるご寄贈・ご寄託の絵画を展示中。会期:～5月6日(月)、月曜休館・月曜祝日の場合は翌火曜休館、観覧無料。

☆今年度も大変お世話になりました！

いわかがみ　第九六号
発行日　令和六年三月
編集発行　せきかわ歴史とみちの館
tel0254-64-1288　Fax0254-64-0300